



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	非コロポックル論
Author(s)	河野, 常吉
Citation	札幌博物学会会報, 2, 43-65
Issue Date	1908-08-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60781
Type	journal article
File Information	Vo.2_003.pdf



非コロポックル論

河野 常吉

ANTI KOROPOKGURU THEORY.

BY

T. KONO.

コロポックル説の由來

北海道本島並に國後、擇捉に於けるアイヌ(以下單に本島アイヌと稱す間に、一の奇怪なる傳説あり。其語る所、人によりて多少の相違ありと雖も、其大要は略ほ一致せり。曰く古昔此地に、コロポックルと云ふ矮小なる人種あり、堅穴に住せるを以て又トイチセクルと稱す。其他トンチンカモイ等數種の稱あり。其性敏捷にして、アイヌと交易せしが、常に身體を見することを嫌へり(稀に裸體なりしと云ふ者あり)。或る時、アイヌが暴力を以て、コロポックルの一女子を捕へ、家に引入れ見しに、其口の周圍と手とに入墨あり。是よりコロポックルは、他に行きて復た其蹤跡を知らず。今日處々に存する所の堅穴、土器、石器はコロポックルの使用せしものにして、アイヌの入墨も亦コロポックルの入墨に模倣せしものなりと。樺太アイヌの語る所、亦略ほ之に似たり。而して北千島アイヌには、絶えて斯くの如き傳説なし。

明治四十年發行理學博士坪井正五郎氏の人類學講話に曰く、「アイヌの口碑によりますれば、日本内地から、北海道に移つた時に人か棲んで居た、彼等はアイヌや内地人と違ひ堅穴をこしらへて、落の葉杯を屋根とし

て居た」と。此記事誤れり、予の調査によれば、アイヌ中には、彼等が日本内地から、北海道に移りしとの口碑を傳ふるもの極めて稀にして、殆んどなしと云ふも可なり。彼等の多くは、古來北海道の地に住居せりと思ひ居れり。又落の葉の下に何人も居りしとか、何人も立つたとか、語る者多しと雖も、落の葉杯を屋根として居りしと云ふ者稀なり。博士の記述としては粗漏を免れず。

此傳説は、北海道に關する舊記中にも、間々見えたり。然れとも何人も此傳説には、甚た重きを置かさりしのみならず、東夷周覽、東蝦夷日誌の如きは、其誤謬なることを辨したり。斯くの如き有様にて、此傳説は久しき間、價值なかりしか、今を距ること約三十年前、ミルン氏に信用せられ、記述せられしより、稍々世人の注意を惹き、尋て今を距ること二十餘年前、今の理學博士坪井正五郎氏、又之を信して其説を流布せしより、大なる勢力を以て世に廣まりたり。但し其前後に於て、上の兩氏の外、コロボックルの存在せしことに關し、説をなしたる者なきにあらずと雖も、比較的重要なるものにあらず。

坪井博士は明治二十年、「コロボックル北海道に住みしなるへし」と説き、又「コロボックル内地に住みしなるべし」と論し、翌二十一年夏、帝國大學より派遣せられ北海道に來り、約二箇月間、巡回調査したり、其間十九箇處に於ける、十九人のアイヌが、コロボックルに關し語る所、大要一致せるを以て、益々之を信し、爾後大に其説を流布し、而してアイヌは全く堅穴に住せしことなく、貝塚土器(以下單に土器と書す)、石器を製造使用せしことなしと斷定せり。然かも樺太アイヌが堅穴に住し、北千島アイヌが堅穴に住し、土器石器を使用せし事實は、之を否認すること能はざるを以て、此等の人民と、本島アイヌとは、全くの同種とは思はれすと辨解し、一方には又コロボックルと、北方のエスキモーとの間に、親密なる關係あること疑なしと爲せり。而して博士は大學の講演に、種々の著述に、處々の演説に之を陳へたれば、其説の珍奇なると、博士

の人類學専門の名望とにより、忽ち人の注意を惹き、一般に流布するに至りたり。

世間普通の人は、坪井博士のコロボックル説に酔ひたるも、意を用ひて研究せる人の中には、之に反對するもの亦少なからざりき。殊に醫學博士小金井良精氏は、坪井博士と同時に、北海道を巡回調査せられしか、其見る所は全く坪井博士と反對にして、本島のアイヌは、堅穴に住し、土器石器を使用したることありと論せり。然れども此等反對派の諸氏は、坪井博士の如く、人類學上好位置を占めざるを以て、比較的其説を廣むるの便宜を有せず、其間に坪井博士は、其養成せる所の人々と共に、自説を流布し、結局筆と口との數に於て、反對者を凌駕し、勢力を占むるに至れり。近時コロボックル説は、學者間に於ては衰運に傾けるも、然かも多年唱道の結果、世間多數人の腦裡に記憶され居れり。

予の駁論を試むる理由

予は人類學者にあらず、唯博渉を好む癖ありて、傍ら人類學の一斑を窺へるのみ。而して北海道に於ける人類學的研究に就きては、其初唯坪井博士の著述を見て、漠然コロボックル説を信したりしか、明治二十七年夏、北海道に來り、間もなく各地を跋涉し、地理並に殖民狀況等調査の際、餘暇を利用して、遺跡遺物等を調査し、忽ちコロボックル説に就きて疑を懷き、尋て其説の誤謬を認めたり。是れ獨り予のみにあらず、北海道に在りて、人類學に志せる諸氏の多くは、予と同一の徑路を取りて、非コロボックル論者となりしなり。蓋し實地調査の結果は、アイヌが堅穴に住し、土器石器を製造使用したること、漸次明白となり、復た奇怪なる傳説を容るるの餘地なきを以てなり。

斯くの如く研究したる予輩の非コロボックル説は、何故か一種の人類學者の嫌忌する所となりしものの如く、明治三十二年札幌

人類學會より、東京人類學會に報告したる記事中、札幌史學會にて「坪井氏のコロボックル説を駁す」と云ふ演説ありしとを載せしに、東京人類學會雜誌には、此一條を削りて、其他を原文の儘掲載したることあり、予輩をして竊に其人の度量を疑はしめたりき。明治三十六年予は上京の機會を以て、東京人類學會の月次會に臨み、チャシ即ち蝦夷の砦に關する演説をなし、且つコロボックル説の誤謬を、簡略に陳へたるに、坪井博士は、追て著述を見たる上、批評を加んと申されたり。依て予は明治三十九年、札幌博物學會會報第一卷に、予の研究せる所を載せ、且つ別に二百部を印刷して、人類學に志ある諸氏に配布せしに、予の説に對して辱くも稱賛の辭を賜はりたる者あるも、未だ其誤謬あることを指摘せられたる者あらず、而して坪井博士は前約に背きて、一言の批評をも賜はらさうき。平常反對論と云へは、直ちに反駁して躊躇せざる博士が、獨り予の説に對して沈黙を守らるるは何故ぞ、恐らくは反駁の材料を有せざるに由るならん。而かも同博士の誤謬なるコロボックル説か、今尙ほ世に流布するを見ては、斯學の爲め予は沈黙を守ること能はす。是れ予か茲に聊か卑見を述べ、以て公平なる批評を江湖の諸彦に、仰かんと欲する所以なり。

且つ夫れ議論は、始終同じ考案により、同じ事を繰返すを嫌ふ。近年コロボックル説=對=非コロボックル説を視るに、耳新しき材料甚だ乏しきか爲め、聞く人をして倦厭せしむる傾あり、之か爲めに研究上一頓挫を來たせる感なきにあらず。而して一方には北海道に於ける遺跡、遺物並にアイヌ語に就きては不十分なから、漸次研究を進めつつあるに、其地僻遠に在るが爲めに未だ世に知られず。されは此等の新研究を發表し、耳新しき材料を供給することの、必要なるは勿論にして、其供給の任は予輩北海道に在るものの負ふべき所なるを信す。是れ亦予か茲に此拙文を草する一理由なり。從て予は成るべく、先輩諸氏が既に述べられたる所を、

縷々反覆せず、主もに耳新しからんと思ふ事實によりて、述ふる所あらんと欲す。請ふ讀者、此拙文を以て予の非コロポックル論の全部と見做さす、此拙文と共に小金井博士、ジョン・パチェラー氏、其他非コロポックル論者の既に説かれし所を参照せられんことを。

本島アイヌは堅穴に住せり

北海道本島並に國後、擇捉に存する堅穴の、甚た古きものにあらさることは、多くの人の認むる所なり。坪井博士も亦同しく之を認め、東京人類學會報告第十二號に記して曰く、

北海道の諸地方より出る土器石器の中には、内地の物と違つて極めて新しく見ゆるか有りますし、宮部金吾氏に従へば、彼地の貝塚から、葵の實や、蟹の爪杯の出たことがあります、又堅穴は埋り易いものであるに、兎に角も、形の存して居るものの多い等の事實によれば、是等の遺跡は、何れも甚だ古いものと思はれません。

尋て坪井博士は、コロポックルは本州より九州にも、住居せるものとなし、其最も繁昌したる時代は、凡そ三千年以前なるへしと云ひ、其遺跡遺物か本州のものより、北海道のものの方新らしきにより、コロポックルは南より北に行きしものなるへしと云はれたり。

予輩も亦堅穴に就き調査せるに、其造り初めの年代は之を知ること能はずと雖も、其使用の終りの年代は存外近きにありしことを知るを得たり。明治二十九年秋、予は北見國常呂郡常呂村常呂原野區畫地内に數多の堅穴あるを見て、偶々同處に會合せし北海道廳屬井口亢一郎氏(後御料局に轉勤)と共に、其一個を掘りて、土器片及び焼石等を得しか、翌三十年井口氏は再び同處に至り又一個を掘りて、其内より石製烟管及び石製紡錘車を得たり。此貴重なる採集品は、其後大野延太郎氏か、本道巡回の際寫し取られたれば、蓋し帝國大學人類學室に保存せられあるならんと信す。扱て此石烟管の堅穴より出たる事實は、其使用者か堅穴に住せしことを、推定せ

しむる一材料にして、石烟管使用の主人公か、アイヌたることは、後章石器に就きて論する所により明瞭なり。而して烟草の始めて日本に入りたるは、天文以後の事にして、其後漸次諸方に廣まり、慶長十年(西暦1605年)には、奥州地方まで流布するに至りたりと云へは、其蝦夷地に流布せし年代は、古くも今を距る三百年前後と想像するを得へし、尤も之に就きては、又烟草か大陸より、樺太アイヌに傳はり、更に本島に入りたりと云ふ人あるやも知らされとも、當時の事情此事なきは、地理歴史を知る人の首肯する所なるへし。而して石烟管の堅穴より出てたることは、アイヌか堅穴に住したる一證たると共に、又其穴を使用したる年代を推察せしむるに足るものなり。

鳥居龍藏氏は明治三十二年擇捉島 モヨロップ、紗那附近、及び色丹島に於て、堅穴を掘りしに、穴中より現今北海道 アイヌ か使用し居るものと同形なる、樺皮製の籃様の物の破片を得たるにより、其穴の餘り古きものにあらざるを推測し、其石器時代の堅穴住居者の、餘り遠地に往き居らざるへきを言はれたり(東京人類學會雜誌第二百九號參照)。其他北海道本島の堅穴より、現今 アイヌ の使用する植物性の物、並に鐵器等の間々出てたることあれば、是れ亦本島 アイヌ か、餘り古からざる時代まで、堅穴に住したる事を、推定しせむるに足るものなり。

天野信景著述の鹽尻と云ふ書に、吉十郎外八人の舟子か、伊豆附近にて難風に逢ひ、蝦夷地に漂流し、穴居人の爲めに救助せられたる、漂流船書上の寫を載せたり。之を摘録すれば、

(前略)五月二十日島の様な所、相見え申候に付、力を得、傳馬船を下し、上り可申と存候得共、大分の荒磯にて舟にては上り申事中々難叶候故、十町許沖より各泳ぎ上り申候得ば、人家も見え不申、山深く相見え候故、如何可仕と存居候處、七尺許の者一人參り、何とやらん申候得共、一圓通し不申候故、此方より助くれ候様にと相頼候得とも、是も通し不申候に付、手を合せ禮を致し候得ば、彼者も手を合せ禮を致し候て、私共手を引、山の奥へ連

参り申候。十四五町許参り候得ば、穴を掘り、上を木の皮などにて、かこひ申候家段々御座候。何れも疊五六疊も敷可申體に相見え申候。内より右の族の者、段々出合引入申候。五穀の類は一切無御座、オットセ、生鮭、生鯨、猪熊など煮焼不仕候て、生にてくれ十二三日の程、身命をつなき居申候。逗留仕候内見申候得ば、右の者木の弓矢を以て、魚獸を取申候。此處奥蝦夷トカチと申處の由に御座候。(下略)。

右は蓋し享保六年(西暦1716年)の事に係り、其地は今の十勝國廣尾郡の西部に屬するものゝ如し。尙ほ此漂流民は、之より送られて今の日高、膽振地方を経て、松前に着し、町奉行高橋淺右衛門の取扱を受けたるか、書上には十勝の外、穴居の事を記せず。是に由て之を觀れば、當時アイヌは一般に穴居せざるも、奥地に至りては、尙ほ稀に堅穴に住したるものありしを知るを得へし。

以上の事實によれば、本島アイヌは奥地に於ては、二三百年前まで、堅穴に住居したるものあること明かなり。坪井博士は堅穴を以て、全くコロボックルの遺跡となし、其人種は北方に逃れ去りたりと云ふと雖も、若し眞に北方に逃れたらんには、多くの年代を経る今日、其事跡に就き千島列島、若しくは樺太に於て、多少の證據を發見せざる可らず。然るに明治三十二年、鳥居龍藏氏は帝國大學より派遣せられ武藏艦に便乗して、千島を探検せられたるか、毫も其證跡を得ること能はざりき。予も亦三十三年武藏艦に便乗して、千島を調査したるか、同しく得る所なきのみならず、北千島土人(今の色丹島土人)は、自ら太古より北千島に住したると言ひ居れり。又露人の始めて北千島に來りし頃は、明に北千島アヌイ住居し、他にコロボックルの如き奇怪なる人種を見ざりき。樺太に至りてはアイヌ、オロコ、ギリヤークの諸人種居住し、又松前藩の記録によれば文明十七年(西暦1485年)樺太の夷酋、今の渡島國上の國に來り、松前氏の祖武田信廣に瓦硯を献したることあり、コロボックルの其地に入りたる證據は、毫も之を認むること能はず。されば坪井博士もコロボックルの逃路に就きては、餘程苦慮せしも

のと見え、其近著人類學講話には次の如く漠然記載せり。

コロボックルは、一旦北方に行きましたが、又南に戻りまして、それから何處へいつたか、わからぬのであります、疑問は黒潮に随つて、アリウシア諸島にいつたか、又樺太の方へいつたかと、云ふことであるのです。

コロボックルが、一旦北方に行き又南に戻りしとは、如何なる論據ありて、斷定せられたるか、南に戻りしとは何處の邊まで戻りしか、予輩は北海道に在りて、アイヌの口碑を聞き、又遺物遺跡等を見たるも、毫も斯くの如き事實を認めず。殊に矮小人か粗末なる小舟にて、遙か沖の黒潮まで、乗出し、遠きアリウシャン諸島に至りしかと云ふに至りては、常識ある人の想像し能はざる所なりとす。坪井博士の此記事の如きは、畢竟窮餘に出てたる、一辯解と見るの外なかるべし。

アイヌ語の研究は、又本島アイヌの堅穴に住せしことを説く一材料となれり。アイヌ語のコト、又はコツは、堀、穴、窪地等の意義を有し、而して村を意味するコタンなる語は、コトの在る所と云ふ義なれば、コタンは即ち穴ある所にして、後に轉して、穴なき村をも稱するに至りしものならんと説く者あり。又コロボックルと云ふ語は、從來種々に解釋せられ、殊に多く落の葉の下の人と解し、全くアイヌ人種と異なれる者の如く思惟せられしか、ジョン・パチラー氏は、研究の結果、チロボックルにして、下の人、即ち土の下に住する穴居人と解し、アイヌか即ちチロボックルなりと説かれたり。此等語學上の解釋は正確なりや否や、今尙ほ斷言し難しと雖も、亦以て参考に供すべきものなり。

本島アイヌはチャシを使用せり

チャシ即ち砦は、北海道に於て、堅穴に次げる重要なる遺跡なり。チャシに關する些末の記事は、諸書に散見すと雖も、其詳細に至りては、未だ曾て研究したるものあるを聞かす。坪井博士の如きも、北海道巡回の後、種々調査せる所を發表せられたれとも、

チャシに關しては、殆んど語る所なく、唯僅にチャシの名と其館跡たることを知りしに止まりしものの如し。想ふに博士が數十日間、巡行せられたる北海道の道路の附近には、數多のチャシありしも、恐らくは博士の眼には、其一個も見當らざりしならん。坪井博士の實地調査が、精確なりしや粗漏なりしやは、此一事を以て之を推察するに難からず。即ち博士の北海道調査は、實地の研究よりも、寧ろアイヌの口碑、其他皮相に偏したるの憾あるものと云ふも、不可なかるべし。

チャシを少々詳細に研究したるは、予を以て嚆矢となす。其研究の大略は、既に本會會報に掲載し、又地學雜誌第二百十二號、第二百十三號に轉載せられたれば、再び茲に贅せずと雖も、要するにチャシに關しては、アイヌは、或は自己の祖先の造りたるものなりと云ひ、或はコロボックルの造りたるものなりと云ひ、一定せすと雖も、研究の結果は、アイヌの使用したるものたること甚だ明瞭にして、復た毫も疑を容れざるなり。故に予は、坪井博士と雖も、恐らくは之に反對すること能はざるべきを述べ、尙ほチャシと密接の關係ある或る堅穴も、亦アイヌの使用したるものなることを説きたり。而して爾後之に關して、未だ異論の出でたるを聞かず。

茲に注意すべきはチャシと堅穴とは、共にアイヌの使用したるものなりと雖も、其使用の年代に、少しく一致せざる點あることはなり。即ち或るチャシは堅穴と同時に使用せられたるも、或るチャシは、堅穴と同時に使用せられざりき。其證は、一方には、チャシの内部に堅穴を有し、若しくは其近傍に堅穴ありて、兩者の間に密接の關係あることを示すと共に、他方には、チャシのみ存して堅穴を見ざるものあるによりて之を知るを得べし。而して本島アイヌが全く堅穴を廢したるは、今を距ること約二百年前後にして、其全くチャシを廢したるは、今を距ること約百二十年前後とす。即ちチャシの廢止は、堅穴の廢止よりも後れたるものにして、從てチャシに關

する口碑は、堅穴に關する口碑よりも、比較的正確なるものあるへきを想像するを得へし。是れアイヌか、堅穴を以てコロボックルに歸するに拘はらず、チャシに就きては、之をコロボックルの遺跡なりと云ふものと共に、又往々明白に自己の祖先の遺跡なりと言傳ふる者ある所以ならん。

シャチは比較的時代の新しきか爲め、比較的精確なる研究をなすを得たり。而して其研究の結果は、チャシに關係ある、堅穴及び石器土器鐵器等を、アイヌに結び付くるを得て、コロボックル説を、消滅せしむるに與りて大に力ありき。其委細は予か既著に就て見らるへし。

本島アイヌは石器土器を使用せり

坪井博士は、アイヌは石器土器を製造使用せすとなし、皆な之をコロボックルの遺物なりとなせり。東京人類學會雜誌第三十一號に博士の述へられし所を見れば

私か北海道東南部に於て實視した事と、西北部に付き人から聞いた事とを申しますれば、矢の毒を作る時に用ゐた白杵と、煙草を呑む時に用ゐる火入の他には、アイヌの器物中石の物はござりません。(中略)。毒を作る時の道具は平らな石と丸い石とて、自然に好い加減の形に成てゐるのを、選んで使ふ丈で、故らに白の形、杵の形杯を作るのではござりません。火入は輕石の様な軟な石を、刃物で削て作るのをござります。現今のアイヌの石の道具とは、斯んな物でござりますが、昔は如何でござりましたらう。經歷地方何れのアイヌに尋れましても、我々の先祖は、石で作た鏃や斧を用ゐたと云ひ傳へる杯とは申しません。(中略)。アイヌが昔土器を作たかと云ふに、之も彼等の云ひ傳へにはござりません。

是れ博士か巡回中、現在のアイヌ等に就き見聞せられたる所なるか、博士は輕卒にも斯かる見聞に基づきて、アイヌは石器土器を製造せすと説かれたり。今博士の挙げざる石具にして、アイヌの使用したること明白なるものを云へは、第一は前に述べたる石烟管にして、アイヌは之をシュマキセルと云へり。安政五年(西曆1858年)松浦竹四郎氏の、東蝦夷日誌に曰く、

シカリベツアト(十勝國十勝川左岸)人家四軒、上陸してしばし過ぎ廣野に出、此處に當午年九十九歳に成しシュツコハ婆と云ふものあるか故、訪ひいろいろ故事を聞しか、文化度亂の話等をもして、別に臨て、岩煙管(シュマキセル)を一本呉れて云へるは、我等若き時は皆此キセル、又は木もて作りて吞しか、近頃の土人は、金の煙管で煙草を吞み、米にて醸る酒を吞て、木綿もて縫し衣服を着る、如此に隨て日増に、土人の風俗もなくなりぬと笑ひたり。

同氏の十勝日誌中、古器物の圖解に曰く

石煙管、是は今にても山中にては用ゆ。北蝦夷(樺太)の東岸にては胡女共惣て之を用ゆ。

是に由りて之を觀れば、石煙管は、安政年間迄は、間々本島アイヌに使用せられ居りしなり。而して此石煙管か、前に記せし如く、紡錘車と共に、北見國常呂原野の堅穴より出てたるに至りては、實に博士の意外とする所ならん。尙ほ同形の土製紡錘車を、明治二十六年北海道廳員高畑宣一氏か、石狩國樺戸郡新十津川村の、堅穴より發見したることは、東京人類學會雜誌第百三號に記載あり。又高畑氏は同地の堅穴に於て、數多の土器片、及び一個の土製韃筒の口に、鐵屑の附着せるものを採集せられたるか、蓋し此韃筒は、或るアイヌか他處に於て、和人の鍛冶をなすを見習ひ、其方法を知り、堅穴に歸りて後、土を以て韃筒を作り、鍛冶を試みしものなるへし。

アイヌの多くは、其祖先か石器土器を使用せすと言ふと雖も、然らば鐵器を得ざる前は、如何なる器具を使用せしかと問へば、唯知らずと答ふるのみ、稀れには石器土器を使用せしならんと言ふものあり。坪井博士も北海道巡回の際、日高國平取村のヘンリウウ、釧路國厚岸町の田村紋助等より、彼等の祖先は石器土器を使用せしなるへしとの事を聞かれたり。之に就き博士は、彼等は比較的開化せるものにして、想像を交へ語るか故に取るに足らずとせられたり。然れども、アイヌか石器土器を使用せりとの口碑か、全くなかりしと斷言するは輕卒なり。松浦氏の十勝日誌に曰く、

リフンライ(十勝川左岸)其上に穴居跡三十餘あり、土人は小人の跡と云へり、是小人ならず古人の穴居をなすこと、此地のみならず内地にも所々にて見たり。(中略)。又爰より雷斧石、土器の缺等出るよし、全きは至て稀なりと。言傳に往昔鐵器の無き時は、此地鍋も土にて作り用ひ、野菜魚獸等の肉を切に、此雷斧を用ひ、家財を作るにば石錐、石鑿等の物あり、人と擊合叩合等する時は、霹靂礎、又は石槌等言ふ有り云々。

土人の言に我等の法として、何一つ人間地(シャモチ)より來らざるとて事たらぬことなきなり。また山中には煙管も木又岩にて作り用ひしか、追々演近く予等も住む様になり、器財も衣服も奢侈に成て、今は我等木綿を着、眞鍮の煙管を持つ様になれり、依てそれ丈、土人の氣力衰へ、力も弱り、質朴の氣も失けりと。いかにもの様におもはる。

此記事に據れば、今を距ること五十年前に於て、十勝アイヌの一部分には、石器土器を使用せりとの口碑を存したるものの如し。蓋し十勝國は漁利少なく、其アイヌは多く海岸を離れたる地に住居し、和人に接すること少なかりしを以て、比較的古風を残し、古き言傳を存せしものならん。

ジョン・バチラー氏は、アイヌの石器を使用したることを證すへき、貴重なる一のアイヌ語を發見せられたり。氏は十勝國に赴き、一老婆に逢ひたるに、老婆は入墨を指してアンチビリと云へり、アンチは黒曜石、ビリは疵なり、即ちアンチビリは、黒曜石の疵といふことにして、アイヌか黒曜石の破片を以て、入墨を施したるを知るべし。(バチラー氏の論文參照)。又日高國にシュータ(鍋を作りし處)、及びオタシュ(土鍋を作りし處といふ)といふ地名あるか如き、土器を作りたる一證として大に玩味すべき所にあらずや。

予のチャシ、及び堅穴等調査の結果によれば、其内部より石器土器を出すものあり、石器土器と共に金屬器を出すものあり。石器土器を出さずして、金屬器を出すものあり。殊に此の事實はチャシに於て多く認めたり。而して此事實より察すれば、アイヌは初め石器土器を使用し、金屬器其他便利なる器物を得るに従ひ、漸次石器土器を廢し、終に全く石器土器を使用せざるに至りしものなり。

尙此の件に就きては、當學會會報「チャシ即ち蝦夷の砦」に記する所を参照せらるべし。

本島アイヌ樺太アイヌ北千島アイヌは同人種なり

アイヌは堅穴に住したることなし、石器土器を使用したることなしと、斷定したる坪井博士も、樺太アイヌの堅穴住居を否認すること能はざるを以て、辯解して曰く、

樺太アイヌと本島アイヌとは全く同種とは思はれず、夫れ故、一方の事實を、他の事實に當て嵌めることは出来ない。

博士は唯斯くの如く、漠然簡單に辯解するのみにして、兩アイヌ間に如何なる差違あるやに就きては、毫も陳述する所なし。本島アイヌと、樺太アイヌとは、骨相、言語、風習其の他大體一致して、異人種にあらざることは、從來之に接したる多くの人の皆認むる所なるに、獨り坪井博士のみ見解を異にするは奇と云ふべし。尤も兩アイヌ間には小差異あるは勿論なるが、其小差異を以て、異人種なりと云はば、奥羽、關東、畿甸、九州の各和人も同じく小差異あれば、皆同種にあらざるべし、豈に斯くの如き理あらんや。博士の見解の如きは、實に駁論すべき價值なきものとす。本年博士は樺太に赴き、親しく調査せられたりと聞く、知らず尙ほ執拗にも前説を維持する勇氣ありや否や。

樺太アイヌは、堅穴に住居したるのみならず、土器をも製造使用し、又石烟管の如きは開拓使の頃、尙ほ稀に使用するものありたり。其土器製造の事は、間宮林藏氏の北蝦夷圖說、鈴木重尙氏の唐太日記等に記載し、殊に北蝦夷圖說には、「地夷製造する所の土鍋ありと云々」と明記せるに拘はらず、坪井博士は、此記事殆んど要領を得ずと云ひ、從て鳥居龍藏氏の如きも、疑惑して當時唐太アイヌが製作使用せしや、又は單に口碑に残り居りしや疑はしと云はれしが、之れ曲解なり。箱館奉行たりし羽太正養氏の、休

明光記附録第七卷に、寛政年間樺太に在勤越年せる番人太郎吉、卯右衛門兩人に尋問したる書留を載せたるが、其内に曰く、

鍋は夷人持たざるものなく、へな土を以て拵へ、素焼にして魚類を煮るへな土とは埴土のことなり。當時樺太アイヌか、埴土を以て素焼の土器を作り、之を使用したること、復た一點の疑を容れざるなり。

北千島アイヌは、堅穴に住し、土器石器を使用したること甚だ明白なれば、坪井博士の最も嫌惡する所なりき。故に博士は常に北千島土人と云ひて、北千島アイヌと言はず、此人種を以て、殆んど度外に置かんことを努められたり。而かも常識ある人は、皆北千島アイヌの、本島アイヌと同種なることを信ずるを如何せん。鳥居龍藏氏の如きも、實地調査の結果、北千島アイヌの、他のアイヌと同種なることを認められたり。殊に同氏が、言語上に於て最も發揮する所ありしは、同氏著述の北千島アイヌなる書によりて明かなり。予も亦千島巡回の際、調査する所あり、札幌人類學會に於て、其視察談を述べたるか、其内先輩の未だ多く述べざる風俗の部の一節を摘記せん。

現時に於ける北千島アイヌの風俗は、昔日に比すれば大に變化せりと雖も、彼等の言傳へ、聞傳への談話によれば、昔時彼等の婦女は、口邊と手とに入墨をなし、又一般に神事に柳のヌサ(木幣)を用ひ、地名にもヌサモシリ(オネコタン島の古稱)、エナオウシベ(幌筵島中の地名)と云ふ所あり、又イクバシユイ(髭篋)をも用ひたり。是れ本島アイヌか現に行ひつつある風習と同じきものにあらざや。又彼等は昔時罪の有無を裁判するに、熱湯中の物を拾はせ、或は水を多量に飲ませ、又人の死するときは、其使用せし器物を添へて葬りしと云ふ。是れ本島アイヌの古風と同じきものにあらざや。其他應接の禮儀、日常の行動等、多く北海道本地のアイヌと均しかりしか如き、皆兩アイヌの同種族たるを明にするものなり。尤もスノウ氏の千島列島誌には、南部の土人に見る如き、彫刻したる木鞘、諸器具なく、イクバシユイなしと記したれども、是は同氏が現狀を寫したるものにして、昔時は矢張彫刻も爲し、イクバシユイも使用したるなり。

言語及び風俗に於ては、北千島アイヌは慥に他のアイヌと同

一種族なり。唯身體に就ては今日調査上、大に困難の點あり。何となれば、北千島アイヌは、昔時カムチャダールの血液を混し、降て露西亞人の血液を混ぜせる等、種々の變化を経たればなり。然かも小金井博士等の調査によれば、現時の骨骼上に於て尙ほ本島アイヌと、別種族なりと云ふこと能はす。北千島アイヌの、他のアイヌと同種族なるは、疑なき所なり。

坪井博士は、又其近著人類學講話に、次の如く云ひて、北海道本島と、北千島との縁を切られたり。

北海道の北方、北千島に至りますれば、石器土器がありますが、南千島及び北海道のものと比較すると、相違が見えます。

此記事頗る簡易なるも、博士が「相違が見えます」と斷言せられしを見れば、兎に角博士は、兩者の間に少なからざる差異あるを認めたるものなるへし。換言すれば、兩者の間に聯絡を絶つ程の差異を認めたるにあらざる歟。然れども是れ亦博士の誤謬なり。抑も北千島に於ける遺物は、從來比較的多く採集せられす。之を稍々多く採集したるは、該地に在る報効義會員、巡回したる鳥居龍溪氏及び予等の一行位に過ぎされは、未だ精細に言ふこと能はず。雖も、北千島の北部なる占守、幌筵の二島より出てたる石器は。石斧、石鏃、石棒等にして、北海道本島に存するものと異ならず。又北千島の土器は、厚手の粗慥なるものにして、比較的內部に耳を有するもの多しと雖も、同じ厚手の粗慥なるものは、北海道本島にも亦數多あり。又内耳土器も、間々本島及び南千島に於て發見せられたり。唯薄手にして紋様ある土器か、北千島に極めて稀れにして、本島に多き相違あるも、之を以て坪井博士の如く、漠然南北に於ける石器土器の縁を絶たんとせらるるか如きは。輕忽の甚しきものなり。要するに本島及び南千島の石器土器と、北千島の石器土器との間に、連絡を絶たんとするの説は、今日決して成立すべきものにあらざるなり。

因に云ふ。北千島には比較的多くの骨器ありて、精巧に製造したるもの少なからず、是れ蓋し同地には寄鯨多きに因るならん。北海道本島には比較的骨器少なしと雖も、禮文島、利尻島を含める北見國の西北部の如き、骨斧、骨槍其他種々の骨器を出したるは、既に人の知る所なり。予は又明治三十一年友人一色藤之助氏(今東京人造肥料會社員)と共に、釧路國釧路町舊會所附近の、高臺の一端にありし貝塚(數年の後再び行きしに既に全く切崩して跡を存ぜず)に於て、僅の時間に骨槍、骨銚其他骨器約三十個を拾ひたることあり。其後予は之を他に分與したるも、一色氏は蓋し之を保存し居るならん。其他二三點の骨器を出したる所は本島處々にあり。而して本島發見の骨器を以て、北千島の骨器に比較すれば、種類の多きと、精巧の點に於て、本島の方概して劣るものの如しと雖も、大體に於ては一致する所ありて、兩者の連絡を絶つ程の差異を認むること能はず。

北海道本島アイヌ、樺太アイヌ、北千島アイヌの三者、既に同種族たり。而して樺太アイヌ、北千島アイヌの二者か、堅穴に住し、石器土器を製造使用したりとすれば、本島アイヌも亦同じく堅穴に住し、石器土器を製造使用せりとの推定は、一層確實の度を増すものなり。唯本島アイヌは、比較的早く此等の使用を廢せるにより、之を使用せりとの證跡も、亦比較的早く消滅せりと云ふべきのみ。

實地調査せる人々は多くコロボツクル説を否認す

コロボツクル説は、今日尙ほ世間多數の人に信せられ居ると雖も、其原因は主もに人類學の大家たる坪井博士か、輕卒にアイヌの口碑に重きを置き、之を信して廣く流布したるに由るものにして、信する人の多くは、研究して信したるにあらず、唯漠然聞きて然りと思ひ居るのみ。其實地研究せる人々に至りては、坪井博士と反對にして、博士の主張するコロボツクル説の全部、若しくは幾部分に對し、其虛妄なることを言はさるものなし。松浦竹四郎氏は、弘化、安政の頃、遍く北海道の地を巡回し、數多の遺跡を見、又好て遺物を拾集せられ、明治維新前に於ては、此等の調査に關し氏の右に出づるものなかりしか、氏は終に、アイヌを以

て堅穴に住し石器土器を使用したものと爲し、コロボックルの曾て住居したることを信せず、所謂小人(コビト)は古人なりと言はれたり。ジョン・バチラー氏は、明治十三年以來北海道に在り、人類學に志ある外國人中、最も永く北海道に居らるるものなるか、氏は研究の結果、全然コロボックルを否認し、其虚妄を辯しられつつあり。其他畏友關場不二彦氏の如き、故の白野憂雲氏の如き、高畑宣一氏の如き、並に予の如き、永く北海道に在りて研究せる者は、皆非コロボックル論者なり。而かも其多くは、最初コロボックル説を信し、研究の後、其誤謬を曉りたるものにして、其論據頗る堅く、他の漠然聞きて信するものと大に同しからざるものあり。

鳥居龍藏、大野延太郎の二氏は、多年坪井博士に親炙し、コロボックル説を信し居られたりしか、明治三十二年北海道出張後、其説の幾部分を變更したり。鳥居氏は「北千島以外に内耳土器の種類は存在する乎」と題し、東京人類學會雜誌に掲けたる論文中に曰く、

私は此事實からして、アイヌは曾て石器時代の人民であつて、しかも土器を製造し、堅穴に住んだと考へる。今日のアイヌの土俗は、一步も二歩も進んだものであらうと考へるのである。

樺太アイヌの土器に關する言傳へは、北千島アイヌの土器に付ての口碑と、能く類似して居ます。此類似は決して偶然のものとは考へられない。殊に二者は、人類學上より等しきアイヌである。此點から考へて見れば、アイヌは曾て土器を作つて居つたことか明かである。今日北海道本島のアイヌには、其口碑がなく、僅に文化文政の當時に、樺太アイヌに傳へられ、又今日北千島アイヌに傳へられてゐるのであらう。北海道とても、よく其考へて調査して見たならば、或は少しく手かかりがあるかも知れぬ。

其後鳥居氏は、太陽第九卷第十三號に掲けたる、「坪井、小金井兩博士の意見を讀む」と題する論文中には、昔時北千島アイヌか、北海道本島及び南千島に居住したるものと假定し、本島アイヌか日本内地から渡來するに及び、遂に追はれて北千島に退きたるものとなし、以てコロボックル問題を解決せんと試みられたり。即ち氏

の説はコロボックルに關する奇怪なる部分を一切抹殺して、コロボックルを以てアイヌの一種族なる北千島アイヌと假定するものなり。蓋し氏の實地調査せるは、千島のみなるか、若し一步を進めて北海道本島を調査せられたらんには、尙は一層變改して、予輩の非コロボックル説と一致するに至りしならん。

大野氏は北海道西部を巡回せられたるのみにして、其日數も多からず、鳥居氏程には其説を改められさりしか、而かも歸京の後、發表せられたる所によれば、其堅穴に住し石器土器を使用したる人民は「平常交通稀なりしアイヌの異部落の者なるか、全くアイヌとは別種のものなるか」と疑はれたり。若しアイヌの異部落の者なりとの疑か、的中したらんには、奇怪なるコロボックルの説話は、甚た價值なきものとなるに至らん。

長く北海道に在りて調査せる人々は、全くコロボックル説を否認し、短時日なから來りて北海道の幾部を調査せる人々の多くは、コロボックル説の幾分を否認するに至りたり。殊に坪井博士に親灸せる鳥居、大野の二氏か其説を改めたるか如き、最も注目すべき價あるものとす。是れ實地の研究は、コロボックルに關する傳説を容る能はさることを示すと共に、坪井博士等か、未開人の口碑に重きを置き、輕々論斷したる誤謬を慥に證明するものにあらずや。

コロボックルはアイヌの小説なり

本島アイヌか、樺太アイヌ、北千島アイヌと同しく、曾て堅穴に住し、石器土器を使用したりしことは、前に説く所によりて明白なり。然かもコロボックルなる人種にして、尙ほ在りしと云ふ證據あらは是亦成立せざるにあらず。即ちアイヌも堅穴石器土器を使用し、コロボックルも亦同しく堅穴石器土器を使用したりと解すへきも、如何せん、コロボックルの存在に就ては、覺束なきアイヌの説話の外、他に毫も證明すへき材料なきを。

本島アイヌに作り話の多きことは、坪井博士既に之を知れり。而して作り話の多きを知りつつ、其奇怪なるコロボックルの話を信したるは、蓋し各處のアイヌの語る所、大要一致せるに因りてならん。然れども其話の一致こそ却てコロボックルの作り話たることを證せるを如何せん。若し眞にコロボックルか廣く北海道に居住し、アイヌか之に衝突して追ひ退けたりとせんか、其衝突は必ず各地に於て何回もありしなるべく、従て其口碑も亦種々ならざる可からざるに、西は渡島より東は擇捉に至る迄、廣く散在する所のアイヌか、萬口一律、唯單に、コロボックルの一女子を捕へ見しより、彼等は去りて見えす」と云ふのみにして、他に衝突に關し毫も傳ふる所なし。是れ和人間に於ける猿蟹合戦及び桃太郎に關する作り話の、萬口一律、廣く世に流布すると均しきものにあらずや。

コロボックルの身體の大きさに就ては、近時普通のアイヌは、唯アイヌよりも小さき人民なりしと云ふもの少なからずと雖も、アイヌの故老の多くは、甚だ矮小なるが如く云へり。即ち一枚の蔭の葉の下に數多の人が居れりと云へり、其小なること知るべきなり。蓋し甚だ小なるが如く云ふか、此説話の本來なりしを、其餘りに奇怪なるを以て其後説き曲げて、唯比較的小なる人と云ふに至りしものと察せらる。斯くの如き甚だ小なる人は、小説の外にあるべしとは、何人も信する能はざる所なり。

コロボックルは明らかに身體を見せざりしと云へり。然れどもアイヌが之と接觸し、或は交易をなし、或は戦争をなしたりとせば、其間何回も彼等を見ざる道理なし。而して其口邊の入墨も、手の入墨も曾て之を見たることなく。最後に一女子を捕へて、始て知りたりと云ふに至りては、奇も亦甚だしと謂はざるべからず。

コロボックルの小説たることは、從來之を説ける人少なからず。殊に畏友關場不二彦氏は、札幌人類學會に於て、コロボックルはアイヌの小説なり」と題し、矮小人種に關する小説の往々未開人の間に

存する例等を擧げて論しられたれば、予は茲に重ねて多言を費やすの必要なし、唯手近に本邦にもコロボックルの外、他に矮小人種に關する小説あることを言ひて、參考に供するに止めん。其第一は朝比奈三郎の島巡りにして、同人が小人國に至りし面白き話なり。今日は斯の如き作り話を語る人も殆んどなき有様なるが、三四十年前迄は随分世間に流布せし小説にして、予も幼少の頃は嘗て小人島なるもののありしことを信じたる時期ありたり。第二は臺灣の蕃人中に存する口碑にして、予は明治三十六年第五回内國勸業博覽會を參觀せしに、臺灣館内蕃人の寫眞器具等を陳列せる部に、下の如き解説ありたり。

サルソー古土器、ヴォヌム族の口碑に、昔濁水溪上の山中に、サルソーと云へる軀幹極めて短き異族棲息す、屢々戰て之を夷滅せり、且其遺跡と云へる土地に古土器を堀ることあり、果して斯る矮人の臺灣に住したるや、其土器は其遺物なるや、又はヴォヌム族祖先の遺物なりや知らず。

尤も同島蕃人中アミス族、及びヤミ族は今日と雖も、粘土を以て土器を造りつつあるか、軀幹極めて短きものにあらず、軀幹極めて短しと云へは、大にコロボックルに似たる所あり。坪井博士は既にコロボックルを以て、北海道より本州、四國、九州迄蔓延したるものとなせり。知らず、ヴォヌム族の口碑により、更に進んで臺灣迄蔓延したりと云ふの勇氣ありや否や。兎に角濁水溪上に、他の人種か棲息せりや否やは、別問題とするも、其矮小人種に關する事は小説たるを免れざるなり。

コロボックル説は既に破壊し了れり。終りに臨み予は切に坪井博士に向て希望せざるを得ることあり。夫れ本邦には人類學者多からず、而して人類學の大家は無論坪井博士にして、其説く所は是非に拘はらず、普通人に信用せられ易く、從て誤謬なるコロボックル説の如きも、主もに博士の主張によりて世に流布したり。然

れとも博士のコロボックル説は、論據甚た乏しく、殊に近著人類學講話中に載する所の如きは、益々奇怪にして、而かも詳細の説明なく、其讀者を迷はすこと益々甚しきものあり。是れ予か斯學の爲に憂慮する所なり。予は今博士に望む。博士にして依然コロボックル説を維持せんとならば、之に就きて一層詳細に、一層明晰に説明を與へらるへし、是れ學者の義務なり、博士の責任なり。否されは斷然其説を變改せらるへし。若し尙ほ全然コロボックル説を放棄すること能はざるに於ては、責めては先づ鳥居龍藏氏か改められし位の程度迄改めらるへし、是れ斯學の爲めなり、世人の爲めなり。予は學者か如何なる程度迄執拗なるべきものなるや、茲に之を論する暇なしと雖も、而かも坪井博士のコロボックル説に於ける執拗には感服すること能はざるものなり。博士の斯學の大家たるは人皆之を知れば、一コロボックル説を變改せりとて、決して博士の價值を損することなかるへし。否な其非を改めらるるに於て却て度量の廣きを示し、益々價值を高むべきなり。

明治四十年十二月 札幌に於て記す。

附 錄

坪井博士の樺太に於ける人類學的調査の誤謬

坪井博士は明治四十年樺太を巡回調査せられ、歸京の後、「樺太に於ける石器時代人民に關する研究」と題し、史學會に於て講演せられたる由にて、其大要は載せて明治四十一年一月發刊の、史學雜誌第十九編第一號にあり。其の記する所によれば、博士は益々コロボックル説を確信し、益々其説を主張して疑はれざるものの如し。是れ誠に驚くべく嘆すべきことにあらずや。

坪井博士が樺太に於ける遺跡の甚た古きものに非ることを説かれたるは可なり。其最も新しき堅穴の如きは現存せるアイヌの使用したるものなりき。而して博士の謂ふ所のトンチ(コロボックルに同し)の堅穴と、アイヌの堅穴とに如何なる差異ありやと云ふに、博士が「アイヌは土鍋を使用せず、之を記録に徴し口碑に問ひ土俗に察するも是等の遺物はアイヌの祖先の物にあらず」と言はれたるを見れば、蓋し其遺物によりて遺跡を區別せんとする者なるへし。然れども土鍋を以てアイヌの使用したるものにあらずとなすは、博士の調査の淺薄なるに因るものなり。若し博士にして先づ羽太安藝守の休明光記附録を讀みて、「夷人鍋を持たざるものなく、へな土を以て拵へ云々」とあるを見、次に間宮林藏氏の北蝦夷圖説に就きて、「地夷製する所の土鍋あり云々」の記事を見られたらんには、忽ち自己の誤謬を曉らるるならん。樺太アイヌは慥に堅穴にし、石器土器を使用したる人民なり。

坪井博士は又某アイヌか、「八代の祖、トンチと接觸せしことありと云ふを以て、推定年代の傍證となすに足らん」と言はれたる由なるか、一アイヌか偶々斯く語りしとて、之を信するは愚の至りなり。理學博士神保小虎氏は、曾てコロボックルなる語の解釋に關し、佐藤重紀氏の質問に答へて、「其穿鑿は或は無効ならん、如何となればアイヌの思想は淺薄にして甚た不確實なるか故に、以て證據と爲し難きこと多ければなり」と云はれたるか、是れ甚た味ふべき言にあらずや。坪井博士が不確實なる、アイヌの談話に重きを置くの傾あるは、予の大に遺憾とする所なり。

坪井博士は又某アイヌか、「トンチとは自ら稱する所、其義を知らず」と云たるにより、トンチはアイヌ語にあらず、コロボックルの自稱なりと、斷定せられたる由なるか、トンチは北海道本島アイヌか言ふ所のトンチンカモイ、又はトンチンクルの略言にして、トンチはトイチに均しければ、結局土の家に住するを意味するア

アイヌ語なるへし。即ちアイヌ自らトイチたるものなり。

坪井博士は、「遺物を以て之を推すに本洲より北海道に移れる石器時代人民、即ちトンチはアイヌと争ひて、北方一は千島に、一は樺太に竄れしなり」と述べられたる由なるか、是れ博士一個の妄想に止まる漠然たる推定なり。想ふに樺太には博士の所謂トイチの遺跡中、今を距ること百年乃至二百年前後のもの少なからざるべき筈なるに、當時に於ける松前の舊記類に據れば、アイヌ語の地名は今日と同じく處々に附せられありて、アイヌの分布區域を示すのみならず、トンチの如き他人種と相争ひつつありし事實は、毫も之を發見すること能はず。換言すれば、アイヌの祖先か博士の所謂トンチなるものにして、別にアイヌと相争ひたるトンチあるにあらざりしなり。アイヌ以前に如何なる人民か住したるや否やは、別問題として之を措き、兎に角、博士のトンチに於ける想像は、之を空中に樓閣を書かくの類と評すべきのみ。

坪井博士のコロポックル説は、樺太の調査によりて一層味噌を附けたり。其説く所の淺薄にして奇怪なる、半銭の價值なしと雖も、然かも其人類學の大家たる位置は、以て世人を導きて益々迷路に陥らしむるに足らん。是れ予か之を默視すること能はざる所以なり。唯本會々報紙數限あれば姑く筆を茲に擱き、其詳細は更に本會月次會に於て演ふる所あらんと欲す。

明治四十一年二月 札幌に於て追記す。
